

その年、康夫は五十年ぶりで中学校同窓会に出席した。故郷の会津盆地は暮れから雪の降り続く大寒波の年になった。幹事達が冬に企画したのは、正月休みが土日を含めて5日に亘るのを考慮したという。

還暦は数年前過ぎていたにも拘らず『還暦同窓会』とこじつけてしたもの、地元幹事達がしばらく同窓会を企画しなかった理由からだ。会場を東山温泉地一番の老舗旅館に決めて厄払いの式典も用意した。

「高橋さんから私に電話があったわよー。あなた、今回も出席しないって返信したんでしょッ・・どうしてかしらねえー。熱心に誘われるんだから、行けばいいのにー」

「なんで、君に電話するんだ？」

「私からも勧めて欲しいと言ってたわ。還暦祝いも兼ねた同窓会なんだから行けばいいのにー・・私だったら絶対断らないわ。恩師に会えるのも嬉しいものよ」

「そう？うらやましいね。俺はそれが嫌だから行かないんだ」

「お父さんの十三回忌から、しばらく帰っていないでしょッ。高橋さんも会いたがっているんだから、一度くらい顔を出さないよ」

「うるさいなー、大雪の中、同窓会もないだろーが」

「五十年も同窓会に出ないなんて非常識でおかしいわよ・・」、『まるで犯罪者ね！』

「うるさいなー」、『なんも知らんくせに』

「それにイー、何か大事なものを見せたいと言ってたわ」

「そんな餌、まかれてもね」

高橋からは出席伺いの往復はがきも、再三の電話もあった。やはり見せたいものがあるからとしつこく誘われた。尚も、喧しく続く妻の小言でケンカになると、

「うるさいなーもオウ。出ればいいんだろッ、出ればあー・・」

誘導尋問に負けて康夫は渋々出席することになった。

高橋とは同じ村に育ち高校まで一緒だった。趣味が同じというか、小さい頃からやることなすこと猿真似じみでいて、双子のようにいつもくっついて遊んだ。上京して就職先は別々だったが、下宿先はそう遠く離れていなかった。仕事先での苦労など困った時はいつも相談し合った。でも、五年も過ぎぬうち

に彼は親の面倒を見ると言って突然田舎に帰ってしまった。いつも東京の水に慣れないことをこぼしていたから、それが田舎に帰る一番の口実だと思う。今は長男のかわりに実家を継いですっかり專業農家だ。東京にいた頃より積極的で明るくなった。

母校は福島県会津の片田舎で、Eという同じ学校名で小学校と中学校が一つのグラウンドを挟んで建っていた。皆、実家は代々続く專業農家だから転校する者もなく全員がそのまま中学に進級し、二クラス七十名は組替えしても顔ぶれの変わらない小さな学校だ。

同窓会を終えて、高橋が声を掛けてきた。

「康夫君、今日は、帰らないで実家に泊まるんだろ？」

「なんも決めてない・・面倒だからこのまま旅館に泊まるかな」

「そりゃーいい！これから卓球クラブメンバーで二次会するんだ。出てくればよな。千葉君も五十嵐君も仕事で同窓会に出なかったけど・・」

「強引に俺を誘ったくせに、二人ともずい分だな」

「そう言うなよ。康夫君は上京組だしこれまで参加したことないだろう。彼等だって会いたがっているんだ。メインはこっちさ」

「まッ、卓球クラブの方が、同窓会より気が楽だけどね」

二人とは何年ぶりだろう。高橋と上京したての頃は帰郷すれば何度か四人で顔を合わせた。彼等とは集落も離れていたせいか、高橋が出戻りして以来会うことはなかった。

待ち合わせのバーは、手作りカヌーやルアーなどの釣り具を飾った洋風のバーだ。BGMが静かに鳴っていた。

「イマジンか・・田舎には洒落た店だね。よく来るの？」

「いや、俺じゃない。カラオケバーじゃ、うるさいしね」

「千葉君だな・・ビールズ好きだったもなあ」

「憶えてるじゃないか。でも、今日はよかった。来てくれてありがとう」

「今さら、あらたまるなよ・・」

彼は鞆からいかにも大事そうに茶封筒を出した。その大きな茶封筒からコロンと転がり出たのは、封筒に似合わぬほど小さな記念バッチだ。

「コレッ、持ってる？」

「なんだ？見せたいものって、それか？」

「ハハハ、つままない顔するなあ。だけど、俺には大事なもののさ」

そう言うと、バッチを擦りながら、困ったようにしわんだ笑顔を向けた。

中学卓球クラブが会津大会で優勝した記念バッチだった。

「久しぶりで見たら、ホラッ・・こんなだよ」  
手渡された優勝バッチはどこどころ塗装が剥げおちている。今となっては悲しいほど粗末な作りだ。康夫のものはこれまで取り出して見ることもなかった。こんなものがと手にして見ていると、なぜか「ズンッ」と、胸が痛くなつて不思議に当時のことがよみがえってくる。

「・・どう？」

「変だね・・こんなバッチなのに・・」

「そうさ！こんなでも俺達卓球クラブには宝なのさ。それに、忘れちゃならない人がいる・・そうだろう？」

「もう、忘れた」

「ウソつけ！俺は時々朝練を思い出すよ・・忘れたことなんかないよ」

「朝練か・・」

「康夫君が来て、ようやく全員揃うんだ。実はバッチの他に皆に見せたいものがある・・誰よりも康夫君には先に見てもらいたいと・・そう、思ってたさ・・」

高橋はバッチの入っていた同じ封筒から写真を出した。四ツ切モノクロ写真で、卓球クラブが地区優勝した時の写真だった。

「アッ、水野さんだ」

「ナッ、驚いたろ？」

彼の娘がパート先の写真館で、偶然に見つけたものだと言った。

「俺も驚いたよ・・破棄するフィルムの中にE中学の卓球クラブが写っていたんで、貰って来たと言うんだ。優勝記念後のスナップだろうね」四ツ切りに拡大した。と言って手渡した。

「・・・」

康夫の中学時代の思い出は水野さんがすべてだった。康夫にとって神様のよくな存在だった。その水野さんが写っている。優勝盾を持った水野さんに、クラブ員達皆が体を寄せ合うようにして笑っている。水野さんにもこやかに笑っている。

最後の別れになるとも知らずに、駅のホームまで見送った。あの日のままだ。そして、あの時のやさしい笑顔だ。ある日突然春風に乗ってやってきて、いつの間にか冬の吹雪の中を去って行った。ほんのちよつと顔を出して、希望の光を射して、熱い情熱を残していった。『必ず帰る』と康夫達に約束して、とうとう戻らなかった。写真一枚残さない神様だった。

○

E小中学校は、康夫の集落から三キロほど北に位置してある。

校歌には『会津のなかほどに・・』と謳われるように、会津平野の真ん中に位置してどこまでも広がる田んぼの中に二十軒程の集落が離れ離れに点在している。小中学校の二つの校舎はグラウンドを挟んで向い合せて建って、東側に桜の木、西側にポプラの木が二つの校舎を囲むように並んで立っていた。創立が明治に遡る歴史ある学校の面影は、並木の成長した大木にも、木造の古びた校舎にも残っていた。

ここに通う子供達の集落には共通する固い決め事があった、村ごとに三組から五組に分かれて結束している。会津藩の名残からか、村は村で組は組で厳しい約束事があったから、年長者は同じ組の年少者を兄弟同様に良く面倒を見た。

会津藩校の教えは什の掟となつて、『卑怯な振舞いをしてはなりません』『弱い者はじめはなりません』『虚言をいうのはなりません』と、幼いころから厳しく教えられるから、子ども達だけの間では今のようないじめなどの問題は全くなかった。学校へ登校する時は村の神社に朝早く集まって組の順に並んで登校するのが常だった。冬は雪深く吹雪くこともしばしばだったので下級生を面倒見る習いは自然と続いていったのだろう。

しかし、帰りは自由だった。田んぼ道や畑道をジグザグに思うままに毎日違う道を帰った。四方を山に囲われた会津盆地の長閑な田園の中を道草しながら帰った。女の子は畔の野花を摘んで首飾りを作って遊んだ。集落の中を流れる川は田んぼに引き込む水路となつて縦横に流れている。だから、流れを溜める大きな関も所々にあった。男の子は川の浅い場所を選んでゴムの短靴のまま川へ入った。そして、手掴みで小魚やドジョウ、ナマズ、ザリガニなどなんでも獲った。ゴム靴は汚れないしすぐ乾く、農家の子ども達は靴下など履く者はいなかったし、学校に近い村では下駄で通学する子供もめずらしくなかった。

そして幼い康夫達は、ひも付きのズックを校内専用の内履きものと思ひ込んでいたのだ。東京オリンピックが間近に迫る頃、ようやく外履きもズックになったように記憶している。

その年、康夫は六年生になった。五輪という祭り事とともに電化製品も増えていく生活から世の中の変化を感じていたのだろうか、蛹が最初の脱皮をするような自分自身に目覚めはじめていた。

夏の盆休み、一番年長の従兄が東京へ就職後、初めて帰郷して康夫の家に挨拶に来た。集団就職で三年は帰らないという田舎特有の約束事を守つての帰郷だった。

そして、康夫にヘルマン・ヘッセの『青春は美わし』という本を土産にくれ

た。単行本で装丁もしっかりしていたと思うが、もうその本も失くしてしまつたのでわからない。しかし、文章の所々に水彩画やペン画など、ドイツの美しい田園風景の挿絵があつたことは強く記憶に残っている。

本を貰つてしばらくは文章を読むというよりも美しい挿絵をめぐっているだけだつた。こんな風に絵を描けるならどんなに楽しいだろうと思うと、その絵を見ながら模写したりした。最初はただ単に挿絵の美しさの虜になっていたのだ。

しかし、小学六年といえども脱皮しようとする康夫には挿絵の影響は大きかつた。誰がいつ、何故、どうしてもこのように描けるようになったのか。知りたくなれば文章も読まずにはいられない。読めば挿絵以上にヘッセの流れるような情景描写や、自然への讃歌を謳う文章に心が震え、読むほどに惹きつけられていった。

本の主人公が少年から青年へと成長する中で、見知らぬ街へ旅をする。出会つた人と恋をする。旅をしながら独り立ちしていくその姿は、思春期に脱皮をうながそうと風が吹いた。

その後ヘッセの本は『車輪の下』『デミアン』など、手に入るものは読んでしまったし、何度も読み返した。どの本の主人公からも、恋、友情、旅、絵、詩の影響を知らず知らずに受けた。主人公が恋をすると、康夫も本の中の彼女に恋をした。ときめく胸は、経験のない幸せを感じさせてくれる。ときめく胸は、見るもの全てを変えていった。そして、この愛くるしい、せつない想いを現実を持ちたいと思つた。

同級生の女子の中に誰からも好かれる頭のいい可愛い女の子がいた。康夫と同じ村に住んで村の組は違つていたが登校も同じくしていたから、良く知つていて好きだつた。けれど、ヘッセの恋とは少し違うように感じていた。

もし、彼がそういう意識で接するならば、あの胸の高鳴りを現実のものとして経験できるのかもしれない。違う世界が見えるかもしれない。ふと、そう思つただけで思春期がもたらす独特の恥じらいと同時に、ワクワクする高鳴りはどうにも押えきれなくなつていた。

そんな日が偶然にやつてきた。理科の授業で金属は燃えるという実験をするので、先生の手元を見るために集まつて輪を作つた。皆、我先にと二重三重に囲もうとする。たまたま康夫の隣に彼女が並んだ。そして、先生がピンセットでマグネシウムをはさむのを覗くようにしたら、康夫の頬と彼女の頬が触れ合つた。後ろから二重に押されているから体は引けない。ポニーテールからほつれた髪が頬に、唇に触る。また、押される度に頬と頬は何度も触れ合つた。体

が熱くなった。頬が赤く火照った。

幾つかのマグネシウムが明るく燃え尽きてしまうと、子ども達の輪はすぐに解かれたが、パツと光ったマグネシウムは余韻を残して康夫の目を白く焼いていた。その時、胸のどこかも激しく焼かれて覚醒したのかもしれない。康夫はヘッセの恋以上に胸がドキドキと鳴った。何故か急に恥ずかしくなって彼女の顔を見ることができない。気付かれなかったかとバカな心配もした。ただ何だか大人になったようで嬉しくなった。頬に残る柔らかで温かい感触が余韻を残して、頭の中を忙しく駆け巡った。せつない想い、愛しい想い、これらは何処から来るのか？ 一体どう表現すればよいのか？ 誰かに聞いてみたい、話してみたいと胸が躍った。ヘッセに導かれた康夫はここにいる同級生の誰よりも早く本物の恋を知ったのだ。

初恋は小学卒業まで誰にも知れず秘かに小さく火を灯し続け、弱々と震えながら康夫の羽に飛翔を促していた。

ある日、村の神社にあるブランコに座ってヘッセを読んでいると、同級生がオリンピック記念切手を集めたブックシートを持ってきて自慢げに康夫に見せた。康夫は切手に興味はなかったけれど、ほど良く相手はしていたと思う。その彼が康夫の読んでいる本を探るように見たから、読むなら貸してやってもいいと言った。彼が興味を示せばヘッセの想いを共有できる。ヘッセが教えてくれた友情を経験できるかもしれない。そんな仲間ができれば嬉しいし、もっと深くヘッセを理解できると思った。

でも、彼は全く興味を示さない上に妙な一瞥を投げた。寂しかったが仕方がないことだ。ヘッセを読破した同級生もいないのだから誰にもこの想いを伝えることはできない。もう、それからは誰にも話さないと決めた。

○

中学になってすぐ真新しい国語の本をパラパラとめくって見ると、なんと驚くことに『車輪の下』の一節が掲載されているのだ。四ページほどの抜書きの部分だったが本を手に飛び上がらんばかりに喜んだ。康夫にとって既にヘッセは最も尊敬する人になっていた。とにかく無性に嬉しくて、その部分の授業が待ち遠しくてならなかった。

この小説は、ハンスとハイルナという二人の少年の恋とは違ったせつない友情物語だ。二人は全く異なる性質を持っていたが、早熟な思春期の危うさを共有していた。教師や大人達の残酷で利己主義な無理解をきっかけに、彼等の内面的な相克が共通のものとなって友情を深めていく。その友情に水を掛け、

壊そうとする教師達との確執の物語はあまりにも悲しい結末を迎えて終わるのだが、康夫は二人の友情に恋以上のせつなさを感じて、本を読みながら初めて涙を流した。

いよいよ授業が始まってみると、どこか変だ。何かおかしい。耳を疑うばかりだ。期待は見事に消し飛んだ。否、それ以上に驚き呆れてしまった。

女教師Tは自信たっぷり、授業の出だしからつまらぬ自分の私見を披露した。ヘッセの叙情的な文章を自身の勝手な解釈で評価するばかりか、迷路に戸惑う若者の心を、危うい思春期とばかりに断言して真逆の解説をした。世間を知らぬ若者が陥りやすい過ちだと何度も繰り返し講義した。

さらに、ヘッセの文章はあくまでも四ページ断片だから、文章の真意を理解するには長編すべてを読破しなければならぬ。女教師Tは既に何度も読破したことを自慢すると、中学一年には難解過ぎるからと解説して、この日限りでヘッセの『車輪の下』を終えてしまったのだ。

ヘッセはこの小説を自伝として、少年ハンスを自分に見立てながら書いたものだ。神学校に学ぶハンスは成績も優秀で素行も申し分なかった。しかし、イルナアという早熟で反抗心の強い友に出会うと、その感化に負けてしまっただけだ。二人とも早熟で非凡なために、思春期に想い惑う迷路に入り込んだ。導いてくれる大人に恵まれなかったために、生意気な扇動者と見られた。大人や教師達はただ煙たがっていただけだ。理解しようとしなかっただけだ。

『なのになら、この授業は・・・何もかも嘘っぱちだ！』  
ヘッセの心情を汲み取れば、

『大人は自らの思春期を顧みて、傷つきやすい少年に耳を傾け、手を差し伸べ、思春期を迎える少年少女達を導いてやらなければならぬ。教師としての自己欺瞞や虚栄心など持つてはならない』と願った。

最後まで本を読んだならわかるはずだ。ヘッセは、大人や教師達の無理解、自己欺瞞、虚栄心というものを車輪に見立て、『車輪の下』に、二人を轢き潰してしまった。それが本の題名にした理由ではないか。

女教師Tのヘッセの授業は、熱く燃え立とうとする無垢な精神にバケツで水を掛けるような信じられない授業となった。この物語を再現するような悲しいお粗末な授業になった。そして、悔しいことに深く傷ついたのは、この本を読破した康夫だけだったのだ。

これが中学生生活で最初に負った思春期の傷だ。

康夫の一行日記はヘッセの影響から始まった。小学校六年から中学校一年まで、たった一冊の薄い大学ノートでまだ埋まりきれないのは一日が一行にも満たないからだ。

日付と○△×の三つしかない。△は特になしだから、日付と△しか書かない。

○は一行書く。×も一行書く。

例えば、

『〇うろこ雲が高くきれいに並んだ。寝ころんで見ていたら夕焼けになった。

○あの子の横顔を夢に描いてキスをした。○大きなバツタがびよんと一メートルはねた。金メダルをあげよう。○稲穂が黄色で風になびいている。ゴッホだ。○川面に魚のうろこが光って見える。なぜワクワクするのだろう。○風鈴がさみしく夏休みの終わりを鳴らす。○君を生んでくれた御先祖様にお参りにこう。○君が野花を摘んで首かざりをかけてくれた。だけど夢。○あの子の仲間からジロジロ見ないでと言われた。恥ずかしかった。○ヘッセの絵のように君をうまく描けない。○車輪の下をまた読んだ。胸が苦しくて涙した。○信仰を持ちたい。神学とは何か？』

中学一年の授業は○と一行日記に印した。そして一行書いた。

『〇T先生曰く、教壇に立つ使命とは、十を知って、ようやく一を教えられる』

あの女教師の最初の授業だった。

誰でも中学一年は特別な日だ。思春期の入口だし希望に満ち溢れている。T教師の言葉に胸が高ぶってやはり中学は違うなと思った。いよいよヘッセと同様に旅立ちの日が間近に迫ったと感じていた。

そして、こんな早くに、とうとう一行日記最初の×を印す時がきてしまったのか。くやしい思いでその一行を書いたのを憶えている。

中学に入学して数か月でもう康夫は失望してしまった。戸惑う心はどこまでも深く沈んで泣いていた。T先生の澄ました顔も国語の授業も嫌いになるのはしかたがない。思春期に萌芽する悦びに毒を注いだのだ。しかし、ただそれだけでは済まなかった。更に、他の教師達も同様に、酒に酔うかのように自己欺瞞を披露するのだ。教壇の高みに立つと、悪魔がその高みから囁けどでも言うのだろうか。まるで、それを楽しむように話す。

その年、赴任したばかりの英語のK先生が、授業の合間につまらぬ雑談をした。赴任前の町場の大きな学校は一学年5クラスあったと言う。そこで水泳クラブの指導をして県大会で優勝したことを自慢した。康夫達の学校でも小中学供用としてプールの工事が始まろうとしているが完成は一年後になっていた。

K先生は「百メートル泳げる者はいるか？」と聞いた。誰も手を上げない。泳ぐ場所などこの近辺にはないから仕方ないことだ。

不満げに続けた。

「E校の生徒達は、百姓仕事の手伝いで忙しいわけだから、水泳クラブなど作っても練習にならないし部員も集まらないだろう」と、時々言い過ぎたことを言い訳するようなことも交えて、確かにそう話した。

農作業を百姓仕事と言われたことに、当然怒りも覚えたがどのように反論していいのか誰もわからない。ただ皆、啞然とするばかりだった。

妙な卑下した言い方は中学に入学したばかりのクラス全員に不信感を抱かせて、癒されないほど傷つけてしまったのだ。その証拠に翌年水泳クラブができると我々学年の者は誰も彼も別のクラブを選んだから入部する者はいなかった。康夫も卓球クラブを選んだ。しかし、悪い事にK先生が3年間のクラス担任となった。これが日記二つ目の×となる。

数学のI先生も町場からの赴任組だった。教師の仮面を被った更に卑俗な人間で、雨や雪の日に良く休む先生だった。ある時、時間を持って余した授業はI先生の雑談独演会となった。町場の住まいから学校までの道のりが自転車でも1時間近く掛かるし、途中から汚い砂利道になって、雨の日は泥が跳ねてこれまで大変な思いをして通った。今度車を買ったので少しは楽できるかもしれない。しかし、砂利道を走るのは新車だから本当は通学に使うのは勿体ないのだと話した。

新車の自慢話が続いて、二つばかり笑いを取ろうとして話したが誰も笑う者はなかった。新車を自慢するそのくだらぬ理由は、農機具を買うのが精一杯な農家ばかりで車など持つ家庭は数えるほどもない。まして新車など持つ家などはなかったからだ。また、この嫌み溢れる先生は、喜怒哀楽を思うままにヒステリックに荒げる罵倒で多くの生徒達を傷つけた。

ある日、社会の授業の前、康夫は係りだったので大きな世界地図の巻物を教室に取りにいった。引き戸を開けようとした時、野太いI先生の声が聞こえた。『百姓の子どもでは・・・』それだけがはっきり聞こえると、引き戸を開ける手が止まった。しばらくして、先生達の笑い声が聞こえた。『百姓』という言葉は、教師達全員がE校の生徒達を卑下する共通語だとわかった。

康夫はそのまま教室に戻ると、クラスの仲間具合が悪いからこのまま先に帰ると告げて教室を出た。

六年以上も通い慣れた道を、空を仰いで歩く。胸に渦巻く混然としたものは何か？この怒りを伴った悔しさは何か？誰にも導いてもらえない悩ましさはど

うにもならないのか？と、問い掛けながら歩いた。胸は痛い。涙はこぼれない。体が汚いモノで覆われて吐き気がする。このままじゃ帰れない。いつも釣りをしている水門に行こう。胸の中の汚れを洗いに行こう。何もかも薄汚いモノを洗い流すのだ。

カエルが鳴かなくなつて久しい田んぼには、黄色く色づきはじめて稲穂が風に揺らいでいる。右手の見慣れた磐梯山が青く見える。左手側水門が遠く霞んで見える。畦道に舞う小さな虫の群が康夫の吐く息を好んでついてきた。康夫はそれを振り払うようにメチャクチャに走った。水門への近道を走った。農閑期だから田んぼには遠くまで誰もいなかった。四方の山々と広々とした会津盆地の真ん中に、たった一人ぼっちでいる。空には鳥も見えない。これ等の全てが今、康夫だけのものだ。これ等のものだけは確かだ。これ等の全ては嘘を付かない。

関の水門の端に足を投げ出して座った。麻のカバンから日記を取り出して×とだけ書きなぐつて草むらに仰向けに寝転んだら、滔々と涙が湧いてきて空の雲が揺らいで見えた。草むらの臭いがいい。土くれの臭いがいい。空と山と田んぼとこの水門が大好きだ。田んぼにはもう水を引かないからいい音を立てて流れている。この水の音が大好きだ。そして、田植えをするために素足を苗代に入れる感触や、黄色く実った稲穂を刈り取る時の、乾いた藁の匂いも堪らなく好きだ。

土くれとともに、正直に自然と向き合つて、気儘な風や雨と生きる百姓のどろどろが卑しいのか。大地に素足で立って、自然に感謝して、祈りを捧げる百姓のどろどろが貧しいのか。

涙が枯れると康夫は変わった。極端に変わろうとした。しかし、熟さない矜持からか、私の強い無慈悲で冷えた覚悟が生まれたのだ。決してそれはいいものではないと思っていたが、車輪に轢かれたハンスの死は弱さからくるとわかったからだ。負け犬にはなりたくなかったからだ。康夫はクラスメイトの誰よりも、中学生生活に蒙昧な期待を持ち過ぎたのかもしれない。負けまいとする精神は知らず知らずの内に、彼を腺病的にしてしまった。

それから康夫は教師達が教える勉強に努力しないと決めた。しかし、ハイルナアのように優秀に目立ったり、反抗心を疑われるのはダメだ。優でもなく、不可でもない、普通になろう。むしろ努力して演じようと考えた。康夫には、他に勉強するものを既にヘッセから見つけていたことに気付いた。それは恋、それは友情、それは絵、それは詩と文學、そして旅立ちだった。嘘を付かない確かなものだけで思考する。卒業までの残り二年半を潰されないように事なきをもって過ごそう。生きた貝のように強く蓋を閉じて、こじ開けられないよう

に我慢しよう。と、覚悟を決めたのだ。

康夫は家で勉強しなくても授業の要所だけ聞いていれば普通になれた。質問もしない。答えが解っても手を上げない。どの教師にも必要にせまられたもの以外話ほしない。どの教師達に対しても期待ほしない。どんな不愉快な、どんな理不尽な思いにされようと極限の努力をして無表情を作ろうとした。そして、クラスメイトや他のものに対しては普通に接して、普通に学校生活を送る。他愛無きことを共有して演じると決めた。康夫は誰からも不自然に思われないうにと自分を隠した。

教師に対する無表情と学校生活での素行は、しばらくはうまく演じられていた。優秀に目立つこともない。愚かな失敗もない。成績も普通で素行もおとなしく礼儀も怠らない。少しだけ愛想がない。だから先生達にも声を掛けられない。しかし、水門でひとしきり悔し涙を流した日から、ちょうど1年が経過した中学二年の秋口だった。突然に、ある事件が康夫に降り注いだ。最も醜悪な猜疑心から生まれた事件だった。

I先生の数学の授業で、康夫がうっかり筆箱を落として大きくもない音を立てた。それは愚かな失敗とも違う。

振り向いたI先生と康夫の目が交差した。

彼が筆箱から飛び出した鉛筆類を拾おうと屈んだ時、

「おい、康夫。立て！」と、わりに大きな声だった。

康夫は無言で無表情で立って、I先生と目を合わせた。すると、

「わらったなアー、おい！」と、険しい顔を向けて言った。

笑った覚えなどないが、笑っていないと弁解することもできずにただ黙って無表情で立っていた。康夫のその無表情も素っ気ないし、反省の色も見えないと言って怒鳴った。普段からその無表情がカンに触っていたらしく、教師をバカにしているのかと糺してきた。康夫はいわれのないことで応えようがなかった。I先生が更にしたみかける。普段からの彼の顔付きは教師を見下したもので、生意気に脂下がついている。そういう態度は改めるべきだ。I先生は、彼が教師を尊敬するどころか非常識にも見下すような態度しているからと、自分の正当性をひとしきりクラスメイトに解いて引導を渡した。

「私の授業には、もう二度と出なくていいから、すぐに出て行ってくれ。おい康夫、今すぐにだぞ！」

康夫は教室を出て行った。彼の行動の何が原因で、何が起こったのかもわからなかった。それから卒業の日まで二度と数学の授業には出れなかった。康夫からすれば、出なかった。出たくなかった。

中学は義務教育だとか言って、常識では、親や校長や教育委員会などに告げ口するだろう。一年前に狭量で低俗な教育者達の集まりだとわかっていたから康夫はしない。既に覚悟も決めていたし運命だと思つた。彼はその理不尽さえ恨まないと、何か畏れ多い象徴に誓つていたので。それを恨めば自分も苦しくなる。ハイルナアにはなりたくなかつた。神様が、否、康夫に信仰心はまだないから・・・でも、もし、神という象徴があるなら、理不尽な試練は意図を持つて与えたのだと思つた。ならば、神という象徴が言うだろう。『潰れてはいけない・・・』と。

しかし、残酷な仕打ちによって汚い泥濘に投げ出されれば、×は自然に増えていく。

クラスメイトは同じように中学生活に失望した仲間だつた。その事に触れる話は一切しない。むしろ、康夫に起つた事件を理解できるからこそしなかつた。

ただ、それから困つたのは居場所だ。数学の時間は人目に付かない場所を探すのに苦労した。図書館の片隅だつたり、学校裏の川だつたり、少し離れた神社まで行つて見えない神を恨んだこともあつた。体育館が授業で使用されていない時は一人で楽しくないバスケットボールをした。それでも足りなかつた。いつも文庫本やスケッチブックを持って、少しでも心地良い場所を求めて探し歩いた。私の数学の時間は狂人のように壊れた人間がさまよい歩く、悲しい、苦しい、そして長い時間だつた。